

Rio

豊田市矢作川研究所 月報

◆東海豪雨～あれから10年～ ◆東海豪雨が豊田市の森づくりにもたらしたもの ◆ご案内「矢作川・東海(恵南)豪雨10年企画」／ロビー展「自然災害をみつめて」



8

2010
No. 144

豊田市矢作川研究所 〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028 e-mail yahagi@yahagigawa.jp URL <http://yahagigawa.jp>

東海豪雨 ～あれから10年～

倉地 格

矢作川は往古より、荒川とか暴れ川などとありがたくない代名詞がつき、一度大雨や台風に見舞われると忽ち大洪水を発生して、破堤や越水により人家を流し、田畑にも甚大な被害をもたらした。

やがて時代が下ると、乱流する河川をまとめ水害から守ろうと、応永6年(1399)に乙川合流付近に「六ッ名堤」と呼ぶ堤防が築かれ治水の歴史が始まった。

平成12年(2000)9月11日～12日にかけて矢作川流域各地では大雨が続き、ことに上流域では総雨量が600mmを記録する未曾有の豪雨となった。

12日早朝、不気味なサイレン音に誘われて、長靴と雨合羽の完全装備で川に走った。刻一刻と増水してくる水量は、過去に見たことはもとより、聞いたことすらない怒り狂った姿であった。

上流より押し寄せる水の勢いは、恰も捌口を見失った悪魔が如き形相で牙をむいて立ち向かってきた。川の水波は、平時は下流にむかって出来るものだが、瞬間的に流れが停止したかと錯覚する程、上流に向かう波の様は目にしたことすらない現象であった。

「豊田市史、年表」の、近世の挙母村(現豊田市)での矢作川における氾濫回数集計表によると、

宝暦元年(1751)から寛政12年(1800)の50年間に41回の氾濫があり、実に毎年のように、この川筋で発生したことがうかがえる。村々では水防は死活問題として、いろいろな対策や水との戦いを強いられたことであろう。

数百年の時を経て、今日では治水が安定したかに見える矢作川で発生した、10年前の東海豪雨の記憶を辿ってみるにつけ、只、戦々恐々と土のう積みに励んだ自身の姿が、遠いむかしの人々の暮らしとオーバーラップし、何時の世も自然の猛威に成すすべも無い人間の無力さ、無能さを痛感する。

地球はスーパーマンではない。自浄能力や復元力が劣化した地球に、なお環境の悪化が追い打ちかける昨今。ある研究者は100年後の地球を予測するなかで、“現在より降雨量は20%UP”と云う。

地球からの最高のプレゼントの矢作川と、更なるいい関係を構築するには自然に負荷のかからない生きざまをすることが、私たちに課せられた最低限のマナーであり使命だと考える。

素晴らしい地球と優しい河を求めて

(くらち いたる、アド清流愛護会 会長)

*倉地さんが企画された東海豪雨の写真展が開かれます。詳細は4ページをご覧ください。

今にも豊田市の市街地に溢れ出しそうな矢作川



東海豪雨が豊田市の森づくりにもたらしたものの

原田 裕保

今年9月、平成12年に起きたあの東海豪雨から10年を迎える。矢作川流域では、伊勢湾台風、47災害に匹敵する大災害となった。10年を経過し、改めてこの豪雨がその後の森林行政を変える契機になったと思うところである。

実はその時、私は昼神温泉（長野県下伊那郡阿智村）にいた。やはり雨男だ。11日、大雨の中、車で国道153号線を走り、通行止めもなく昼神温泉に到着。宿泊は高い階だったため、大雨も気にせず就寝。翌12日、起床して初めて事態の深刻さに気がついた。窓の外に見える阿智川は濁流と化し、ホテルはポンプ室が浸水して断水。トイレも使えない。テレビは名古屋市の浸水の様子をひっきりなしに伝えていた。恐る恐る市役所に電話すると「何をしとる！全員出動だぞ！」。ところが土砂崩れで昼神温泉は孤立状態となっていた。153号線はもちろん、中央自動車道も夜まで不通であった。

名古屋市の被害が大きかったためか、テレビはそちらばかりを伝えていたが、それでも長野県の電波は、平谷村役場が壊滅状態であること、根羽村にも上矢作町（当時）にも相当な被害が出ていることを伝えていた。矢作川流域でも長野県の様子は名古屋からの電波や新聞に乗らないことが多いため、豊田市民は最上流部の被害をあまり知らないが、奇しくも長野県にいた私は最上流部の被害を実感できた。

ところで、この東海豪雨でクローズアップされたのが「人工林の間伐遅れ」である。それまでも間伐の必要性は指摘されてきたところであるが、東海豪雨では、“沢抜け”した源頭部や土砂崩れした斜面に間伐手遅れ林が多く見られたことから、人工林の間伐遅れが被害を拡大した、あるいは上流の森林整備の遅れが、森林の保水力を低下させ、河川への出水を増やしたなどの指摘がなされ、人工林の間伐推進

沢抜けした上流の森林（旧上矢作町）



濁流に飲み込まれる小渡小学校（旧旭町）

が矢作川流域の喫急の課題であることが社会に認知されることになった。

この頃私は、環境部環境政策課で「豊田市水道水源保全基金（いわゆる1トン1円）」を活用した「豊田市水道水源保全事業」の準備をしていた。事業は基金を活用して上流の人工林の間伐を進めるというものであった。その年の1月には関係5町村長（藤岡、小原、足助、下山、旭）と基本協定を締結（※）し、間伐事業に着手する直前であった。11月に第1号となる間伐事業を開始したが、東海豪雨の直後でもあり、この事業が間伐に特化したことが改めて評価されるとともに、大きな期待が寄せられたところである。※稲武は平成13年に追加された。

豊田市の水道水源保全事業は全国的に注目され、同様な仕組みが各地で作られるようになった。県内では、蒲郡市、旧額田町、旧足助町、中部水道企業団、（財）豊川水源基金、県外ではいわき市、富岡市、宇部市、今治市、福岡市など。そしてこの流れは平成15年に高知県で始まり各県に広まった森林環境税の創設につながっていった。

一方、間伐を中心とした森林整備の重要性、社会的意義を再認識した私は、水道水源保全事業を環境部に残し、翌平成13年、希望して農林課に異動し、林務行政を本格的に行うことになった。

そして想定もしていなかった平成17年の市町村合併。水道水源保全事業で協定を締結していた6つの町村がそっくり豊田市となった。

合併の意義に懐疑的な意見も少なくなかったこの市町村合併を後押ししたものの一つが、この東海豪

雨であったと言われている。

その年の2月に就任したばかりの鈴木市長は、東海豪雨で矢作川が急速に増水し、堤防越流寸前の危機に見舞われたこと、また矢作川流域で多数の土砂崩れや浸水被害が発生したことを「この時の体験は深く脳裏に焼き付きました（記録集『東海豪雨』前文）」と語っている。また「この時、人工林がもう少し整備されていたら、状況は違っていたのではないかと思った（豊田市100年の森づくり構想前文）」と語っている。「上流の森林を整備することは、中山間地に住む住民はもちろん、下流の都市部に住む住民の安全・安心の確保には不可欠であり、合併して一つのまちになることで一元的な森林整備ができる」という市長の熱い思いが合併につながった。

合併により、旧の豊田市に比べ、行政区域は3倍、森林面積は6倍、人工林面積は実に13倍にもなった。



豊田市中心市街地の矢作川

それまでの豊田市の林務行政の体制ではとうてい期待に応えることはできない。そこで、林務行政を専門に担う組織として、農林課から森林課を分離独立させ、事務所も森林地域の中心である足助に置いた。職員も18名体制（当時）とした。また市町村合併と同時期に、同じ区域で森林組合も広域合併し、本所を足助に置いた。元々県の事務所が足助にあり、森林行政を担う県、市、森林組合が足助に集結し、スクラムを組んで森づくりに取り組む体制が整えられた。

一方、矢作川流域では人工林の間伐を行う森林ボランティアグループが「矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協）」を結成し（平成16年）、活発に活動している。彼らのボランティア活動のモチベーションも、東海豪雨であぶり出された人工林の荒廃を何とかしなければというところにある。

そして彼らと矢作川森の研究者グループが共同し

て「矢作川森の健康診断」を平成17年から6回行っている。第1回の健康診断で豊田市の人工林の6～8割が間伐遅れの過密状態であると診断された。この結果からも豊田市の森づくりの最重要課題が過密人工林対策であることが明確になった。

森林課がまず取り組んだことは、森づくりの方向性を定めるとともに、長期計画を立案することであった。そのために、「とよた森づくり委員会」を設置し、豊田市独自の条例及び構想の立案に着手した。森の健康診断の結果も生かされた。

そして平成19年3月、市議会で「豊田市森づくり条例」が議決され、同時に「豊田市100年の森づくり構想」を策定した。さらに平成19年10月には「豊田市森づくり基本計画」を策定した。この計画では、平成29年度に健全な人工林の割合を50%に高めることを目標に、10年間で2万5,000haの間伐を実施することになっている。このため、現在「団地化戦略」を推進し、森林所有者、市、森林組合が一体となって間伐に取り組んでいるところである。平成21年度末で、68団地、1,090haの森づくり団地がまとまり、順次間伐が進められている。

「災い転じて福と為す」

東海豪雨から10年。被害は大きかったが、この豪雨は人工林の荒廃をクローズアップさせ、この地域の官民をあげた森づくりの取組みを大きく動かすきっかけとなった。成果はまだこれからである。

（はらだ ひろやす、豊田市産業部専門監兼森林課長）

間伐され明るくなった人工林（旧足助町）



土砂崩れを起こした人工林（旧足助町）



▶ ご案内

～ 洪水の教訓を次世代に伝える ～

「矢作川・東海（恵南）豪雨10年企画」を8月より開始します



越水により川裏が崩壊(矢作川左岸, 豊田市森町)

平成12年9月11日～12日の東海（恵南）豪雨により、矢作川流域においては戦後最大規模となる洪水が発生し、多大な被害が発生しました。東海（恵南）豪雨から今年9月で10年が経過します。

近年、地球温暖化に伴う異常気象等により、地球規模で大規模な洪水被害等が発生しており、東海（恵南）地方においても、災害対策の強化が課題となっています。

このため、矢作川流域において、洪水がもたらす被害やその教訓を風化させることなく、併せて水防活動の重要性・河川事業の必要性を幅広く地域へ伝えることにより、地域住民の防災意識の向上を図り、次世代へ伝承することを目

的として、豊橋河川事務所の発案により、流域の3県、22市町村等が共催で以下のとおりシンポジウム、市町村パネルリレー展示等を実施します。

8月 9日(月)～矢作川沿川7市2村での災害状況等のパネルリレー展示

8月25日(水) 矢作川H12出水時の情報伝達訓練

8月27日(金) 危機管理対応訓練

8月28日(土) 矢作川流域圏懇談会を設立

9月 5日(日) 恵那市等における防災イベント

9月11日(土) シンポジウム「矢作川・東海（恵南）豪雨から10年～洪水の教訓を次世代に伝える」を開催

場所：豊田市福祉センター

時間：13時半～16時

詳しい内容につきましては国土交通省豊橋河川事務所のホームページをご覧ください。

URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/toyohashi/history/index.html>

豊田市生涯学習センター 猿投台交流館 ロビー展

「自然災害をみつめて」～東海豪雨・あれから10年～

東海豪雨の被害をつぶさにとらえた写真展を開催します。

日時：2010年9月5日(日)～18日(土)

9時～21時

場所：猿投台交流館 ロビー

(豊田市青木町2-56-26)

企画・資料提供：倉地 格

主催・問合せ：猿投台交流館 (TEL 0565-45-2838)



「ダムにたよらない治水」への政策転換が進められていますが、10年前の東海豪雨で崩壊した人工林を目の当たりにし、矢作川流域ではこれを契機に治水を主目的とした新たな森づくりが始まりました。短時間に記録的な豪雨が引き起こす近年の災害は、これまでの治水対策では凌げない規模となっています。土木技術と自然の治水機能を巧みに活用し、かつ私たちの生活様式を見直すことで、水害に強い流域づくりを目指す時が来ています。(白)